

## ヨハネの手紙第一2章1-14節 「神のうちにいる人」

### 1A 執り成す方 1-2

1B 罪から離れる努め 1

2B 宥めのささげ物 2

### 2A 神を知っている人 3-6

1B 神の命令 3-4

2B 神にとどまる人 5-6

### 3A 兄弟を愛する命令 7-11

1B 新しい命令 7-8

2B 光と闇 9-11

### 4A 次の世代に対する励まし 12-14

1B 手紙を書いている理由 12-13

2B ここまで書いてきた理由 14

## 本文

ヨハネの手紙第一 2 章を開いてください。十二使徒で、他は殉教している中で、最後まで残ったヨハネが、高齢の長老として若い世代の兄弟たちに書き記したのが、この手紙です。

彼は、前回、1 章で、イエス・キリストにこそ、いのちのことばがあり、御父と御子の交わりを私たちが受け取ることができることを教えていました。その交わりには、満ちあふれた喜びがあります。そこで大事なのは神が光だということです。ですから、神と交わるには、光の中を歩まなければいけません。罪を犯してしまう私たちはどうすればよいのか？について答えています。罪を言い表すことですね。へりくだり、罪を犯したことを悲しみ、悔い改めるならば、主は、その罪を赦して、すべての不義から清めてくださいます。

長老ヨハネは、私たちキリスト者の、しっかりと歩みを教えてくれています。そこには、難しいことはありません。私たちは、しっかりと、彼の手紙のことば一つ一つを読み、主との歩みを確かなものにしていきたいと願います。

### 1A 執り成す方 1-2

#### 1B 罪から離れる努め 1

<sup>1a</sup> 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。

この2章の始まりですが、1章からのそのままの続きになっています。なぜヨハネは、神が光であること、また、罪を告白することを勧めていたのでしょうか？それは、罪を私たちがなるべく犯さないようにするためです。罪に勝利することができるようにするためです。これは、罪を全く犯さなくなるという事ではありません。罪はないと言ったら、自分自身を欺いており、罪を犯したことがないと言ったら、神を偽り者とする事だと彼は話しました。

そうではなく、今よりも、これから罪をより犯さなくなるようにするためなのだ、ということです。イエスを信じたばかりの時には、ほぼ毎日犯していた、習慣的な罪があったかもしれない。けれども、罪を告白して、光の中を歩んで、イエス様が流された血によって清められて、それで神との交わりの中で生きて行けば、習慣的な罪が習慣にならなくなっていくことを教えているのです。つまりいってしまうことがあるかもしれませんが、それでも罪を犯さなくなっていくのです。

<sup>1b</sup> しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。

私たちは、イエス様が戻ってこられて、私たちが天にまで引き上げられる時に、今の卑しいからだ、栄光のからだに変えられます。それまでは、アダムから受け継いでいる罪の性質が、このからだに働いています。ですから、罪を犯してしまうことは、十分想定できるのです。しかし、そこで主は私たちがあきらめることはなさらないのです。

「御父の前でとりなしてくださる方」と、ヨハネはイエス様のことを説明しています。ここでのギリシア語は、「パレクレトス(παράκλητος)」です。イエスが、聖霊を遣わす約束として、聖霊を「もうひとりの助け主」と呼ばれましたが、同じギリシア語です。「助けるために、そばに呼ばれた者」という意味です。主は、私たちがつまづいてしまった時、しくじってしまった時、寄り添って、助けてくださいます。ペテロが、ご自身を否む過ちを犯しましたが、その前に執り成しておられましたね。「ルカ 22:31-22 シモン、シモン。見なさい。サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」同じように、今も父の前で執り成してくださいませ。

そして、「義なるイエス・キリストがおられます」と言っていますね。この方は、私たちの罪の身代わりに、ご自身の義をもって、父なる神の前に出てくださいませ。「Ⅱコリ 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて神の義となるためです。」キリストは、罪を犯したことはありません。義を行われました。その義を、私たちにくださいませ。そして、私たちは罪を犯しました。その罪を、キリストの上に置かれます。こうして、キリストが罪人とされ、私たちが義と認められます。まるで、罪を犯さなかったかのようにしてくださいませ。

その義をもって、主は、執り成してください。使徒パウロは言いました、「ロマ 8:34 だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしてくださるのです。」私たちが、罪を犯していなかったとして、執り成すではありません。ですから、世にある弁護人とは異なりますね。検察官の告発をすべて受け入れてしまうのですから。私たちは事実、罪を犯しました。しかし、ご自身が、私たちの罪のために死なれて、よみがえられた、つまり、罪はすべて取り除かれ、葬り去られたことをもって、執り成してください。

## 2B 宥めのささげ物 2

<sup>2</sup> この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。

主が私たちの罪のために死なれた時、「宥めのささげ物」になっておられたと、ヨハネは言っています。この言葉が指している元は、幕屋の至聖所において、契約の箱の上に「宥めの蓋」です（出エジプト 25:19）。全て金で造られていて、ケルビムが彫られています。そこは、神ご自身の御座を表していて、二つのケルビムが翼を重ねて礼拝している姿を現しています。そこから主が語られます。そして、レビ記 16 章に、宥めの日、あるいは贖罪日に、大祭司が行うことが書かれています。大祭司が年に一度、民の罪のための、雄やぎのいけにえの血を携えて、宥めの蓋の前で血を振りかけます。これによって、民全体の罪を神が清めてくださるのです。

同じように、キリストは、世全体の罪のための宥めのささげ物になっているのです。罪の赦しは、キリストにあって、世界の全ての人に与えられています。しかし、それを受け入れるか、受け入れないかは、各人にかかっています。受け取る者が、事実、自分の罪が贖われるのです。

ところで、「宥め」と訳されている言葉は、誤解されやすいです。あたかも、神が怒りに満ちていて、その怒りをなんとか宥めるために、キリストが犠牲のいけにえになってくださった、というように受け取られてしまいます。事実、ここのギリシア語は、異教において、怒り長ける神々を宥めるための、いけにえとして使われていました。

しかし、聖書の神は全く違います。「Ⅱコリ 5:18 神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。」私たちと神を和解させたのは、父なる神ご自身です。神は、私たちと和解をしたいと願われ、すでに和解を用意しておられるのです。キリストが身代わりに死なれたのですが、父というものは、子が苦しむ時、本人が苦しむ以上に苦しむものです。神が、ご自分の独り子が十字架の上で苦しんでいる時に、神ご自身の心の痛みは、計り知れないものです。とてつもない苦しみです。

神にとっての「宥め」は、義なる方が、正しい審判者として、罪に対する裁きを全うするという事です。罪に対する正しい怒りが、満たされます。聖書には、正しい裁きが行われた時に満足される神の姿があります。例えば、エレミヤ書には、バビロンによってイスラエルを裁かれる神がおられます。一度、エルサレムが破壊され、人々がバビロンに捕え移されたら、主は、彼らの罪に対して報いることをせず、幸いだけを教えています。バビロン捕囚でご自身の義を全うされたからです。ゼカリヤ書には、エルサレムを虐げた諸国に対して、主が、馬を通して戦われる姿が出てきますが、最後の馬が出て行った後で、「わたしの霊を鎮めた。」とされています(5:8)。それで、裁きを全うされたということです。

黙示録 16 章でも、七つの封印、七つのラツパ、そして七つの鉢の災いを主は地上に下しましたが、最後の第七の鉢が、地上にぶちまけられる時に、「事は成就した。」とされています(17 節)。そこで、思い出してください、主イエスが十字架の上で、間もなく死なれようとする時に、発したことばを。「完了した。」です(ヨハネ 19:30)。終わりの日に主が裁きを貫徹される時に、実はその御怒りは、ご自分の御子に置かれていたのです。世の終わりにおける神の裁きは、御子を否み、悔い改めないことに対する裁きです。ですから、これ以上、キリストに信頼する者たちには御怒りが残っておらず、ただ、アブラハムに約束されていた祝福だけが用意されているのです。

## 2A 神を知っている人 3-6

このようにして、罪に対する神の備えがあることを見ました。ヨハネは改めて、神との交わりにおいて、偽りと真理があることを語り始めます。

### 1B 神の命令 3-4

<sup>3</sup> もし私たちが神の命令を守っているなら、それによって、自分が神を知っていることが分かります。

ヨハネは 1 章で、「神と交わりがあると言いながら(6 節)」という言い方をしていました。ここでは、「自分が神を知っている」ということを言っています。「神を知っている」ということを、当時、グノーシス主義に影響された者たちが、使っていました。「私は、これこれのことを知っている。」と言って、「だから、私は神に近い、あなたがたは遠いのだ」として、霊的に高ぶっているのです。

しかし、はたして彼らは本当に、神を知っているのか？ということを試さないといけないのです。ここの「知る」は、「交わる」ことと意味が大きく重なっています。ここでヨハネが使っているギリシア語は、「ギノースコ γινώσκω」です。知的に知っていることではなく、人格的に、親密に知ることです。アダムがエバを知ったという時に使うような、「知る」であります。知識の上で知っているのではなく、神を知っているのです。

もし、人格的に神を知っているならば、この方に従うはずなのです。そこで、ヨハネは「神の命令

を守っているなら、神を知っていることが分かる」と言っています。聖書の中には、数々、神を知り、それで神に従った人々に満ちています。預言者イザヤは、天の御座の幻を見て、自分が滅びてしまおうと嘆きましたが、御使いが祭壇の炭火を彼の口に当てて、彼は清められました。そして、主が、「だれを遣わそうか」と問われた時に、「ここに私がおります。私を遣わしてください。」と言いました(6:8)。ペテロも、漁をしている時に、イエス様に言われたとおり網を降ろしたら、大漁になりました。自分の罪深さを知りましたが、イエス様に、「あなたを、人をとる漁師にする」と言われて、それでイエス様に従っています。この方は神であられ、主権者であり、そして父のような権威者であります。そして慈愛に満ちています。ですから、この方を人格的に知れば、自ずとその命令に従うのです。

<sup>4</sup> 神を知っているといいながら、その命令を守っていない人は、偽り者であり、その人のうちに真理はありません。

前回、ヨハネがこの手紙を書いていた時、グノーシス主義という、ギリシアの哲学に影響を受けた異端の教えを奉じていた者たちが多くいたことを、お話ししました。グノーシスというのは、先ほどのグノースコ「知る」の名詞形で、「知識」という意味です。彼らは、知っていることを誇りにしていました。「私たちは、このことを知っている。あなたがは、まだ知らない。」として、霊的なエリート主義に陥っていました。しかし、肝心要の「行い」がともなっていません。言っていることはすごいのだが、やっていることがまるで違う、ということが起こっていたのです。

彼らは霊肉二元論を信じていました。つまり、目に見えない精神的なことは神に属するが、肉に関するものは悪であり、神は関わらないとしていたのです。だから、肉と肉の欲に対しては、何ら力を持っておらず、その人の生活は敬虔なものに変わっていなかったのです。

言っていることが優れていると、私たちは、霊的なのだと思ってしまいます。しかし、イエス様が偽預言者を見分けなさいと教えておられましたね。イエス様が、ご自分を「主よ、主よ」と言っている人の多くが、天の御国には入れないことを語られました。その見分けは、「マタ 7:21 天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」ということなのです。彼らが、「あなたの名によって預言し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの奇跡を行ったではありませんか。」と言ったら、「わたしはおまえたちを全く知らない。不法を行う者たち、わたしから離れて行け。」と言われます。預言を行い、悪霊を追い出し、奇跡を行っているのにも関わらず、それでも「おまえたちを全く知らない」と言われるのです。ここでいかに、知るということが、人格的に、親密な形で知っているのかが、分かります。

## 2B 神にとどまる人 5-6

<sup>5</sup> しかし、だれでも神のことばを守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。それによって、自分が神のうちにいることが分かります。



「神の命令を守っている」という言葉から、「神のことばを守っている」と、少し言い換えています。神のことばは、「これこれ、こうなさい」という命令だけではなく、約束もあれば、慰めや励ましもあります。こういった、諸々の神のことばを心にしっかりと留めているならば、ということです。

そうしているならば、「その人のうちには神の愛が確かに全うされている」と言っているのです。ここには、ヨハネが福音書で書き記したことに、深くかかわっています。イエスは、最後の晩餐の時ですが、こうあります。「13:1b イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。そして、世にいるご自分の者たちを愛してきたイエスは、彼らを最後まで愛された。」イエスは、弟子たちをご自分の者として愛してこられました。そして、最後まで愛されました。

そこで、彼らの足を洗われました。それから、最後の晩餐の後に、数々のみことばをくださいました。その中で、ご自身の命令と、愛との関係を語られたのです。「14:21 わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛している人です。わたしを愛している人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身をその人に現します。」「14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」

神の愛が全うされている、というのは、こういうことです。イエスは、弟子たちを愛し、最後までとことん愛されました。その愛の中に留まっている人は、自分のすべてを捨てているはずですが、それはちょうど、本当にある人を愛している人が、自分のすべてを投げうってでも、その人のために尽くすのと同じです。イエス様を愛した、不道德な女にことを思い出してください。「ルカ 7:47b この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから。赦されることの少ない者は、愛することも少ないのです。」罪が赦され、愛されていることを知っているのも、イエスを愛します。そして、愛しているならば、この方の言われていることを大事にします。

そして、「自分が神のうちにいることが分かります」とヨハネは言っています。先ほど読んだ、ヨハネ 14 章 23 節で、イエスのみことばを守っていれば、「わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」ということです。神が共に住み、自分がこの方のうちにいることが分かるのです。

そもそも、三位一体の神は、どのようにして一体になっているのでしょうか？それは、「従う」ことによります。権威者である父に、子は従います。そして父は子を愛して、すべてを任せています。聖霊は、父と子の権威にしたがって、子の栄光を現し、また父を示します。このように、互いに従っている中で、一つになっています。このことを基に、パウロはエペソ 5 章で、夫と妻に対して「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。」と勧めました(21 節)。妻が、キリストに従うように夫に従い、夫が、キリストが愛されたように妻を愛して、それで一体となります。ですから、神のみことばを守

っている中で、初めて神の愛が全うされて、それで神のうちにいることになるのです。

<sup>6</sup> 神のうちにとどまっていると言う人は、自分もイエスが歩まれたように歩まなければなりません。

「神のうちにいる」から「神のうちにとどまっている」と言い換えていますね。さらに積極的に、神のうちにいることを説明しています。つまり、共に生活する、時間を過ごす、共有するというということです。そうしていると言う人の目標は、「イエスのように歩む」であります。イエスこそが、自分の信仰の目標なのです。

ジーザス・リボルーション、すなわちヒッピーの中で起こった霊的覚醒において、用いられた伝道者、ロニー・フリズビーがいます。彼は、イエスの格好をしていて、みなからイエスのようだと言われていました。もちろん、彼自身、それがイエスのように歩むということを意味しているわけでないことを知っています。けれども、チャック・スミスは、彼と初めて会った時に、「ついさっきまで、イエスと話してきたかのように、イエスに近くなっていた。」と証言しています。イエスがすべてとなっていたのです。

主は、弟子たちに、「わたしが主であり、師であるから、わたしがしたように、これこれをしていきなさい。」と何度となく、語られました。「ヨハ 13:14-15 主であり、師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのであれば、あなたがたもまた、互いに足を洗い合わなければなりません。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、あなたがたに模範を示したのです。」そして、互いに愛することについては、「13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」イエスが仕えられたから、仕え合います。イエスが愛されたから、愛し合います。

キリストの弟子たちが、「キリスト者」と呼ばれたのは、アンティオキアにある教会においてでした。「使徒 11:26 弟子たちは、アンティオキアで初めて、キリスト者と呼ばれるようになった。」それまでは、弟子たちは「この道」とか呼ばれていました。「ナザレ派」とも呼ばれます。しかし、アンティオキアの町の人々が、彼らを見て、「キリストのようだ」と、あざける意味合いで読んでいたのです。何でもかんでも、キリストのように歩んでいこうとしていたので、そう読んだのです。ちょうど昔、日本でもキリスト者が、「耶蘇」と呼ばれていたのと似ています。あざけって言っているのですが、本人たちにとっては、名誉ある呼び名だとして、自分たちでも使い始めたのです。

私たちも以前、東日本大震災の後の復興支援のために通っていた時に、「イエスのグループ」と呼ばれました。他のクリスチャンたちは、「キリストさん」と呼ばれていたと聞いています。同じ発想です。キリストのように歩んでいるのでなければ、このような慈善は行えないと、その恩恵を受けた人々が思っているから、そう呼んでいるのです。このように、神のうちにとどまっていると言ってい

る時に、キリストのように歩んでいるところに証しされていくのです。

### **3A 兄弟を愛する命令 7-11**

そこで、ヨハネは、神の命令として、「互いに愛しなさい」という命令を取り上げて話します。

#### **1B 新しい命令 7-8**

<sup>7</sup> 愛する者たち。私があなたがたに書いているのは、新しい命令ではなく、あなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いているみことばです。

ヨハネは、再び愛情を込めて、「愛する者たち」と言っています。そして、これから命令を書こうとしています。互いに愛し合いなさいという命令です。それは、新しい命令ではなく、初めから持っていた古い命令だと言います。そして、すでに聞いているみことばだと言います。

神は、みことばで隣人を愛しなさいという命令を出しておられました。イエス様が最も重要な戒めとして挙げたのは、モーセの律法である、レビ記 19 章 18 節でした。「あなたは復讐してはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である」です。申命記の、神を愛しなさいという命令と共に、これらが律法全体をまとめていると教えられました。

けれども、イエス様は、最後の晩餐の席で、イスカリオテのユダがいなくなってから、改めて、愛しなさいという命令を出します。「ヨハ 13:34 わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」なぜ、イエス様は、前から、愛しなさいというみことばがあるのに、「新しい戒め」と呼ばれたのでしょうか？それは、「わたしがあなたがたを愛したように」というところです。イエス様が、すでに弟子たちを愛しておられました。そしてこれから、十字架につけられます。そこにある愛に基づいて、互いに愛し合いなさいというのは、新しいのです。イスカリオテのユダが、この命令の前に出て行ったのは、意味が深いです。彼は、イエスに愛されていたことを知らなかったからです。

しかし、今、ヨハネが書いている時に、主がこの命令を出されてからすでに、60 年ぐらい経っています。ですから、その時は新しい命令であっても、彼らにとっては古い命令です。

<sup>8</sup> 私は、それを新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。それはイエスにおいて真理であり、あなたがたにおいても真理です。闇が消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

60 年経った今でも、主イエスにおいて真理で、あなたがたにも真理である、この命令は、今も、生き生きと、新鮮なものとしてあなた方に与えられていますよ、とうことです。ヨハネは福音書で、



「1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。」と証していましたが、今も、同じようにイエス・キリストが、闇の中でまことの光として輝いているのだということです。

グノーシス主義者など異端は、新しい知識を誇ります。「あなたがたには、これらのことが知らされていなかったが、これこそが真理なのだ。」として、その新しい啓示だと言われるものに引き寄せられるのです。しかし、私たちに必要なのは新しい知識ではありません。もうすでに知っている知識、みことばだけでも、それが新たに、私たちに現実のものとして伝わることです。古いとされている真理にこそ、実は新しいものがもてはやされる世において、最も斬新であり、新鮮なのです。

## 2B 光と闇 9-11

<sup>9</sup> 光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる人は、今でもまだ闇の中にいるのです。

ヨハネは、1章で「神は光であり、神には闇が全くない(5節)」と言いました。そして今、「闇が消え去り、まことの光がすでに輝いている」と言いました。グノーシス主義の異端者は、自分たちが知識を持っていることを光の中にいると主張しました。そして、既存の教会にすることはできないとして、仲間から離れ、出て行ってしまいました。しかし、それは「光の中にいると言いながら自分の兄弟を憎んでいる」ということなのです。

「憎んでいる」という言葉ですが、普通は、激しい妬みから来る感情です。けれども、関係を断ち切るというのは、さらに大きな憎しみでしょう。マザー・テレサは「愛の反対は無関心」という言葉を言ったと言われています。関係を断ち切る、離れるということの裏には、その人と自分と一緒にではないということを話しています。自分はあなたのように信じていないとして、教会の仲間から離れるということは、同じ神から生まれた兄弟ではないと言っているようなもので、兄弟の絆を切った究極の憎しみと言えます。

そういった人は、自分は知識を持っていて、それなりの自己正当化があって、それで光の中にいると思っています。しかしそれは偽りで、まだ闇の中にいるのです。

<sup>10</sup> 自分の兄弟を愛している人は光の中にとどまり、その人のうちにはつまずきがありません。

自分の信仰の兄弟を愛している時に、それはイエス様の命令、「わたしが、あなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。」と行っているのであって、神の中にとどまり、光の中にとどまっているのです。光は、単なる知識ではなく、前回学んだように、「エペ 5:9 あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。」善意、正義、真実というものが、光から出てくる実なのです。これらがある、兄弟を愛する交わりが光の中にいるのであって、単なる知識の量ではないのです。

<sup>11</sup> しかし、自分の兄弟を憎んでいる人は闇の中において、闇の中を歩み、自分がどこへ行くのかが分かりません。闇が目を見えなくしたからです。

ここで単なる兄弟ではなく、「自分の兄弟」とヨハネは強調しています。同じ神から生まれた者として、つながりがあるのにそれを断ち切るような人は闇の中にいます。そして、闇の中にいるだけでなく、闇の中を歩みます。だから、自分がどこへ行くのか分からずにいます。目が見えないままなのです。

自分は見えていると思っていますが、見えなくされていることに気づいていません。イエス様が、生まれつきの盲人を治し、彼がイエスを礼拝した後に、主は言われました。「ヨハ 9:39 わたしはさばきのためにこの世に来ました。目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」パリサイ人が尋ねました。「9:40 私たちも盲目なのですか。」イエスは彼らに言われました。「9:41 もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」見えていると言っているけれども、見えていません。

それで彼らは何をやったか？神に仕えていると思いながら、憎しみを増幅させ、イエス様を十字架に付けるところまで持って行ったのです。そのような気配が見えそうになっていた時に、なるべくユダヤ人の何人かでも光の中に留まるように、以下のように警告されました。「ヨハ 12:35 もうしばらく、光はあなたがたの間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのかが分かりません。」憎しみは、目の前にあるものさえ、見えなくさせます。

人は自分が見えていると思い込んでいます。そして正しい情報さえ与えられたら、人は正しくとらえることができると思っています。しかし、憎しみがあれば、見えるものが見えなくなるのです。心の在り方によって、人は見えるもの、見えないものが変わるのです。

#### **4A 次の世代に対する励まし 12-14**

これからも、ヨハネは兄弟を憎むことについて警鐘を鳴らしていきます。その前に、ヨハネは、最古の長老として、教会の者たち、神から生まれた兄弟たちに抱く愛情は、とても深いです。今、この手紙を書いている目的、またここまで書いてきた目的を書いています。午前礼拝で、詳しくお話ししましたので、ぜひ後でお聞きください。

#### **1B 手紙を書いている理由 12-13**

<sup>12</sup> 子どもたち。私があなたがたに書いているのは、イエスの名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。

「子どもたち」のギリシア語は、テクニオン(τεκνίον)で、小さな子たちを愛情を込めて呼ぶ時に使われます。神から生まれた者に対する、祝福のことばは、「罪が赦されました」ということです。中風の者が床に担がれて、イエスがみことばを語っておられる時に、主が初めに発せられた言葉は、「子よ、あなたの罪は赦された。(マルコ 2:5)」でありました。中風がいやされること以上に、第一に、罪が赦されたということを優先されたのです。それほどまでに、主は、ご自分のものとされた子たちに、罪の赦しの確証を与えたいと願われています。

罪がいかにも、私たちの心を蝕むか、ダビデが罪を犯して、赦しを宣言された後に歌った詩に、良く表れています。「詩 32:1-5 幸いなことよその背きを赦され罪をおおわれた人は。2 幸いなことよ【主】が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。3 私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。4 昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。セラ 5 私は自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを【主】に告白しよう」と。するとあなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。セラ」罪を言い表さない時は、骨が疲れ切り、うめいていました。御手が重くのしかかり、骨の髄さえ乾ききったと言っています。しかし、背きを言い表したら、主はすぐに赦してくださいました。

主が、神によって生まれた人たちに必ず知ってほしいことは、罪が赦されたということなのです。この確信が薄ければ、私たちは、その後、罪に対する力、また神への愛、神への従順、他者への愛、すべてのことに関わってきます。神に愛され、罪が赦されたことが分らないと、自分がさらに罪を赦していただくこと、あらゆることが自分の救いのため、愛を求め、赦しを求め、自己中心的なものとなります。神の無条件の愛、その豊かな赦しを受け取ったからこそ、罪から自由にされ、愛によって神に仕えることができるのです。

<sup>13a</sup> 父たち。私があるがたに書いているのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。

ある人を、信仰に導き、生活を通してその人の信仰を育てるお手伝いをしている人は、信仰にある父と子の関係に入ります。パウロは、テモテに対して、「信仰による、真のわが子テモテへ。」と呼んでいます( I テモ 1:2)。自分が信仰による父だと思っているのです。自分自身は十分に成長し、人を信仰的に養育するような働きをしている人々のことを言っています。

そういう人たちが必要な言葉が、「初めからおられる方を、あなたがたが知るようになった」ということです。初めからおられる方とは、手紙の冒頭にある言葉、「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。」であります。父の特徴は、リーダーシップです。リーダーシップを取るには、初めに自分自身が神の前に出て、そこであらゆる判断と決断をしなければいけません。他の人に頼るこ

とができません、孤独です。だからこそ、彼自身が、自分よりも前におられる方、初めからおられる方が必要なのです。

<sup>13b</sup> 若者たち。私があなたがたに書いているのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

若者は、信仰によって歩み始めてしばらく経った人たちのことを指します。初めは、主に罪を赦していただき、救われた喜びを持っていましたが、自分の肉の弱さを痛感する時期に入っています。若者が、思春期や青年期に抱くのは、自分の身体に働く強烈な欲求です。霊的にも同じように、肉の弱さに気づき、自分の罪を克服できないと悩むのです。

しかし、ヨハネは励まします。罪に対して力を持っているのは悪魔です。世は悪魔に支配されています。世が、私たちの肉の欲を刺激します。しかし、御子は世の支配者を滅ぼすために来られました。すでに十字架につけられ、よみがえられたので、彼の脳天を打ち砕いておられます。だから、打ち勝ったのだと励ましておられます。罪に対して、今までのように犯さざるをえないという、奴隷状態から解放されています。罪は魅力あるもので、犯すようにいつも誘い込みますが、すでに悪い者に打ち勝っているのです。神に従い、悪魔に立ち向かうことができるのです。罪を犯さなくてよい、自由が与えられています。恵みが支配しています。

## 2B ここまで書いてきた理由 14

<sup>14a</sup> 幼子たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが 御父を知るようになったからです。

先ほどは、「子どもたち」でしたが、こちらは「幼子たち」です。子どもは、そのまま子どもの意味合いですが、幼子は、未熟さがその意味合いの中に出てきます。イエスの御名による罪の赦しを得た今は、「御父を知るようになった」というのです。自分がどんなに幼いと感じても、知識においては圧倒的に少ないと感じていても、決してそんなことはない、子は親を知っています。父を知っています。「ロマ 8:15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。」

<sup>14b</sup> 父たち。私があなたがたに書いてきたのは、初めからおられる方を、あなたがたが知るようになったからです。

ヨハネは再び同じことを繰り返しています。ただ、微妙に違います。12-13 節と、14 節の違いは、前者が、「書いているのは」と言っているのに対して、後者が「書いてきたのは」となっていることです。一回目で呼びかけている時は、ヨハネは手紙全体のことを考えながら、「書いている」と言っていたのでしょう。二回目、ここ 14 節では、これまで 1 章 1 節からここまで「書いてきた」と言っているのではないかと思います。

<sup>14c</sup> 若者たち。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが強い者であり、あなたがたのうちに神のことばがとどまり、悪い者に打ち勝ったからです。

若者に対して、再び励ましています。ここでは、まず、「あなたがたが強い者である」と言っています。悪い者にいつも敗北する弱いものではなく、勝利している強い者なのだということです。パウロが言ったように、弱い時にこそ、キリストの恵みが十分にあるので、強いと宣言できます。

そして、「あなたがたのうちに神のことばがとどまり」と言っていますね。午前礼拝で見ましたように、みことばを保っていると、私たちは罪から守られます。イエスご自身が、悪魔から誘惑を受けられた時に、申命記のことばを使って立ち向かわれました。エペソ 6 章の霊の戦いの武器では、「6:17 御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」とあります。みことばがあるので、私たちは悪い者に打ち勝っているのです。

以上、ヨハネの、教会に集っている兄弟たちに、真理を、愛を持って伝えています。罪のこと、神の命令のこと、その命令でも兄弟を愛することについて学びました。